

第二章 太平洋戦争間に於ける大本営鐵道作戰指導の概要

第一節 開戦より昭和十七年夏頃迄に於ける鐵道作戰指導

一、本期に於ける鐵道作戰一般の経過

昭和十六年十二月八日米英に對して戦を宣し東に米國太平洋艦隊を真珠灣に奇襲し西に馬來半島上陸作戰を敢行南方領域濫定の火蓋を切つた。我陸海軍の作戰は引續いて順調に進展し、昭和十七年二月十五日 昭 南 を陥落せしめ更にスマトラ、爪哇、緬甸、比島と次々に南方各地を攻略す。昭和十七年五月迄に南方作戰の第一段階を終り爾後防衛作戰に移して軍政の段階へと入つた。之に應ずる本期に於ける鐵道作戰は先づ南方鐵道を占領開拓して之等一般作戰を推進し且爾後の整備を行ふ事が急務であつた。其の主なるものは次の様なもので大本営鐵道作戰指導の重点として処理された。

1 南方作戰に應ずる鐵道の占領開拓

2 南方占領鐵道の復旧対策

3 南方鐵道管理機構の確立

4 鐵道管理委員の編成派遣

かくて南方鐵道は逐次整備されて行つたが太平洋戦争の対南方施策の根本が努めて国力の消耗を來さざる事を主旨として居た關係上石の様な各種の指導も専ら人的処置に限られ資材的には殆ど見るべきものが無かつた。

此の間滿洲に於ては南方作戦開始後二正面作戦の生起を極力警戒しつつも北方に対する防壁として未だ対蘇主動作戦が堅持せられ鐵道作戦の見地からも大陸重点の考へ方は依然として変化なく

1 種黒線の迅速建設

2 哈牡線の複線化促進

3 大陸鐵道の軍事使用に關する勅令の制定

4 対北方特設鐵道隊の編成準備

等の対蘇作戰に應ずる準備は着々と進められ實質的にはむしろ此の方が大本營鐵道作戰指導の重点であつたと云へよう。

一方支那に於ては開戦と共に香港を攻略し次で第二次長沙作戰を敢行して兩方作戰に策応するところがあつた外大なる作戰を見ず専ら戦力の拡充と治安の確立に努力が續けられて行つたが昭和十七年六月に至つて大陸航空基地覆滅を目的とする浙贛作戰が開始され更に兩方作戰の一段落に伴つて重慶擊滅の進攻作戰が企図されて遂次其の準備に入つた。之等の作戰に即応して大本營は滿洲より鐵道部隊を導用して浙贛作戰に協力させると共に対重慶進攻作戰準備の進むに隨ひ其の集中輸送山西鐵道の増強等鐵道作戰準備に遺憾なからしむるやう処置する所があつた。

此の間内地に於ては昭和十七年四月十八日航空母艦よりする米航空機の一部が東京を空襲した外何等敵の妨害を受くる事無く専ら生産の拡充に意が注がれ鐵道作戰の見地からは対蘇集中輸送の準備上給

0810

船の不足を予期して關門鐵道の完成促進、北九州鐵道の強化等に関し軍より鐵道省に要望した外見るべきものはなかつた。以上の様に鐵道作戰乃至其の準備も逐次進められて行つたとは云へ國軍全般としての之に對する關心乃至考へ方は極めて低調且消極的で資材の配当も將來作戰準備としての鐵道部隊の増強等も殆ど見るべきもの無く全く本戦争の中期末期の作戰指導に即応する基礎を確立し得なかつた。勿論國家物動計畫の全般的貧弱に基くものとは云へ鐵道作戰の本質から見ても遺憾至極と云はねばならない。蓋し鐵道作戰は遠き作戰準備の時代こそ重要であり作戰の實施に際しては単に其の情性に委すに過ぎないからである。

三 南方鐵道

本作戰の進展に伴ふ鐵道の占領及復旧の進行は、南洋方面の諸島の如く南方作戰は馬來作戰を始めとしモスマトラ、爪哇、緬甸、比島と順調に進められたが其の間に於て作戰が真に鐵道に依

守したのは馬來作戰次で緬甸作戰でスマトラ、爪哇、比島等は
 略後の速なる復旧を期待したに止まり作戰遂行のためには大なる
 期待を掛けなかつた。此の爲之に充当した鐵道兵力は次の様で
 つた。

三八

馬來作戰

第三鐵道輸送司令部

鐵道監部

一

鐵道聯隊

特設鐵道隊

二

鐵道材料廠

一

鐵道監部

一

鐵道二箇聯隊

鐵道材料廠の一部

鐵道一中隊

鐵道二中隊

鐵道一箇聯隊

馬來より轉用

スマトラ作戰

爪哇作戰

比島作戰

0812

之等の鐵道は概ね所期の目的を達し作戰終了と共に鐵道復旧の段階へと入つた。鐵道破壊の最も大きかつたのは比島で其の他の諸鐵道は之に比較すれば誠に輕微で緬甸鐵道が若干の大橋梁を修理不能の狀態に迄破壊してあつた外特に大なるものはなかつた。之が為大本營は比島鐵道に対して内地鐵道省より復旧修理班を編成して現地に派遣し当時既に現地にあつた鐵道第六聯隊と共に復旧に任せしめたが其の他の地域に対しては其の後逐次派遣された鐵道管理要員と現地にあつた鐵道部隊で之に当らせ概ね順調に復旧を見るやうになつた。

2 鐵道の管理

南方作戰終了に伴つて南方軍政機構が整備されると共に鐵道管理機構を如何にすべきやの問題が省部間の重大問題となつた。まず占領鐵道は軍之を管理し且其の業務は内地より派遣する鐵道管理要員を以て行はしむる事は開戦当初からの既定方針であつたが軍

政との關係は未決定で統帥部と陸軍省との意見対立し容易に決定
を見るに至らなかつた。

即ち陸軍省が「鐵道は軍政の一部とし其の管理要員は軍政監に従
屬せしむべし」と主張するに對して統帥部は將來の兩方防衛作戰
を考慮して「兩方鐵道は作戰鐵道とし飽く迄軍參謀部に於て作戰
兵站の一部として運営すべし」と主張して互に譲らなかつた。

このやうな意見の対立も軍中央部に於ては何れとも決定を見るに
至らず鐵道は現地軍司令官自らの管理に屬せしめ其の細部は挙げ
て現地に一任するに決し夫々發令を見た。

かくて當時軍政第一の情勢にあつた現地軍は各地共鐵道の管理を
軍政監に任せ其の管理要員を軍政監の指揮下に入らしむるに至つ
たが僅かに緬甸鐵道のみが鐵道部隊を以て作戰兵站の一部として
運営された。

この様な僅少にして重要なる鐵道輸送力の所要部分を直接作戰の

用に供すべきや軍政を通じて兩方の作戦及統治の全般に寄與すべきやの論議は兩者の要求を同時に充足し得なかつた。兩方諸鐵道の管轄上當然な事であるが關係は情況の変遷に伴つて常に兩者の關係を必要とし兩方諸地域が米英の反攻によつて本格的に防衛作戦態勢へと移行するに及んで必然的に鐵道は軍參謀部自らの管轄する所となるに至つた。

3. 鐵道管理要員の編成派遣と管理機構の確立

鐵道管理機構の決定に右の様な経緯を見て大本營は作戦の進展に伴つて逐次内地鐵道省より之が管理要員を編成し夫々現地に派遣して行つた此等管理要員は各地共鐵道の運用に任ずる少數の幹部と現地機關の中堅となるべき一部の要員から成り其の身分は軍屬であつた。

軍屬と云ふ身分に就ては当時國內官民一般特に鐵道省に於ては支那事變の経験から其の待遇の不当を主張して之を好まざ等しく従

軍するならば軍人として従軍致し處希望を有して居り部内に於ても開戦前後を通じて河務軍人制度の制定が研究されたが遂に實現を見るに至らず僅かに軍員の一部に職務上の指揮權が認められたに過ぎなかつた。

かくて此等の管理要員は現地に於て軍政監の指揮下に入り軍政監部の外局として鐵道總局又は鐵道管理局を編成し鐵道の管理經營に當つた。此處に鐵道管理機構は一応確立を見たのである。

南方鐵道に対する資材的施策

前述の様に南方鐵道に対しては其の占領復旧、管理のため各種の処置が採られたが此等は概ね人的施策に止まり資材の注入補給は殆ど行はれなかつた。もつとも開戦当時大本營鐵道復旧用として概ね左の程度の資材を準備したのであるが之とても作戦には殆ど使用されず作戦終了と共に北方への轉用を考慮して其の大部を大本營予備資材として南方軍に保管させた。

左記

軌道材料

約一二〇千分

重構桁鐵道橋

二八組

其の他修理資材

若干

兩方作戰の一段落するに伴つて大本營の北方重視の傾向は愈々強
く鐵道資材の北方專用は單に右の様な作戰用資材のみならず兩方
鐵道の一部を整理撤去して迄計畫準備された。

此の様な一般的考へ方が戰爭第三年以降に於ける兩方鐵道衰損の
原因をなし戰爭第三年に及んで内地より一部資材の注入を計畫し
たが空襲の激化と相俟つて「時期既に過し」の觀を呈して行つた
事は誠に遺憾であつた。

即ち兩方鐵道は之を大観して戰爭第一年に於て獨力にて之を復旧
し第二年目に於て獨力にて之を維持し第三年以降資材の面から逐
次じり貧に陥つたと見るべきであらう。

兩方作戰の華やかな進展にも拘らず對蘇戰に応ずる鮮滿鐵道の鐵道作戰準備は依然大本營の重点的施策として推進された。

即ち従來から對蘇進攻作戰用として滿洲に集積してあつた軍資材の一時流用を認めて哈牡線の複線化を促進し又昭和十七年六月にはそれ迄懸案であつた大陸鐵道の軍事使用に關する勅令を公布する迄になつた。

この勅令は「戰時に際し軍は滿鐵に対し軍事上の命令をなすことを得」同時に朝鮮、樺太、台灣の三鐵道に対し「軍事輸送に關し当該鐵道局長を指揮することを得」る法的根拠を確立したもので軍の鐵道運用上劃期的勅令であつた。この勅令の制定に伴ひ従來大陸鐵道と參謀本部間に於て協議の形式を取つて居た鮮滿鐵道運用規定も改正の要を認め「鮮滿支鐵道戰時準備規定」として改正し關係軍へ指示されたこの戰時準備なるものが専ら對蘇作戰準備を目標として居

0818

た事は云ふ迄もない。

此の間關東軍としては更に魯黑線の迅速建設、各種の状況に應ずべき集中輸送の具体的研究、滿鐵道より編成すべき特設鐵道隊の具体的計畫、滿鐵改組等着々として作戰準備を進めて行つた。

四 支那鐵道

1. 浙贛作戰

昭和十七年四月十八日航空母艦より發した米機は東京地方を空襲し其の一部は浙贛地區の飛行場へ着陸した。

昭和十七年六月開始された浙贛作戰は、之等対日空襲の航空基地覆滅を目的として行はれたものであつたが六月より七月初旬にかけて玉山、贛州、麗水等の航空基地を占領破壊して一応其の目的を達したが結果から見ると鐵道資材の取得作戰の觀を呈し同年八月迄に浙贛鐵道の大部を撤去し軌道材料重軌条約百三十五斤分を
取得した此の爲大本營は滿洲から鐵道監部一、鐵道隊隊一を導用

して其の鐵道作戰に当らせた。此等の鐵道部隊は折柄の雨期に遭
遇して各河川の山水氾濫甚しき中をよく奮闘し右の様な成果を挙
げたのであつた。

此等の取得資材は当時計畫準備されつゝあつた五号作戰用として
充当される計畫であつたが其の作戰の取止めと共に北方作戰準備
用として滿洲へ轉用された。

2. 五号作戰準備

南方作戰の一段落と共に研究を進められた対重慶進攻作戰は之を
五号作戰と呼び主作戰を陝西省より關谷關を経て重慶成都に指向
し一部支作戰を揚子江に沿ひ重慶貴陽に進むる計畫であつた。其
為北支に於ける鐵道が重要な役割を務めなければならなかつた。
即ち此の作戰は南方作戰と異なり所謂大陸作戰で其の集中輸送を
始めとして爾後の補給補充等後方連絡を専ら鐵道に依存し且又之
が本作戰成否の重要なる鍵となる關係から鐵道部門としては南方

作戦以上に重要性を持つものとして大本營、現地相呼応して真剣なる研究準備に入り

1 兩方、内地、滿洲等よりする集中輸送

2 山西鐵道の増強

3 西部瀕海線の占領復旧

等逐次計畫を進め山西鐵道の増強の如きは一部實施に入つた。此の作戦も昭和十七年七月米軍のガダルカナル島上陸を楔機とする用東太平洋戦局の変遷によつて遂に之を放棄する結果となり實施を見ずして終つた。

五 内地鐵道

太平洋戦争前關帝演輸送に引續いて兩方作戦の準備期より開戦初期に亘り作戦兵團の集中輸送を比較的余裕を以て完了した内地鐵道は各方面に対する補充の輸送と共に鐵道の總兵站として兩方鐵道に対する鐵道管理要員の編成派遣等に其の努力が要請された。

同時に大本營は船舶の消耗を考慮して北方作戰準備の見地から關門
三
八
隱道の促進北九州鐵道の整備を鐵道省に要望する所があつた一方鐵
道省としても当時の生産補充船舶逐次の消耗から鐵道への輸送專家
一之を輸送專家又は陸運專家と呼んだ一に即応して鐵道輸送力の充
充を企圖し逐次之が整備を進めて行つた。併しながら軍としては前
線第一主義を採り、南方に引かれ、北方作戰準備に専念して鐵道省
の此等の企圖に対しては「若干の支援を與へた」と云ふ程度に過ぎ
なかつた。

第二節 昭和十七年秋期より米軍のレイテ上陸

前項迄に於ける鐵道作戰指導

一、本期に於ける鐵道作戰一般の經過

南方作戰の一段落と共に國軍は全般に亘り其の態勢を整へ劃期的に
兵備を強化して次期作戰に應ぜんとし一方に於て対重慶進攻作戰を